

イチゴの育苗で、1辺5センチほどの小さいキューブ状に培地を固めた資材で育て、従来のポットへの土詰め作業や重い運搬作業を省力化する方法が広がる。気化熱による冷却効果で花芽分化が促され、促成栽培では高単価な年内出荷もできる。販売メーカーによると、全国約300戸の農家で利用実績があるという。

みのある産業（岡山県赤磐市）が製造・販売する「イチゴエクセルキューブ」は、ピートモスとココヤシ繊維をポリエステル繊維で立方体状に固めた資材。ポリポットなどの代替として使う。使用後は本圃（ほんぼ）にすき込むか、一般廃棄物として処分する。

イチゴ「ゆめののか」を約30㍎栽培する長崎県南島原市の本多哲弘さん（50）

年内取り 全国で利用増 イチゴ採苗・定植 新資材で省力



イチゴエクセルキューブを手にする本多さん[㊟]と家族（長崎県南島原市で）

は、今年産から同資材に100%切り替え、ポットへの土詰め省力化ができた。次作に向けて土詰めをする3月はイチゴの収穫と重なり満足に眠れないほど忙しかったが、解放された。定植の労力も減った。キューブはそのまま本圃に埋め込めば定植が完了するたため、ポットから一度苗を取り出す手間やポットの回収が不要になった。キューブは小さくコンテナに入る苗の数はポリポットの倍。一度に運べる苗が増えた。

資材の活用で、育苗時に花芽分化を促す夜冷処理をしなくても、安定した年内出荷が可能だ。株を人為的に冷やさないため根が傷まず、花数を確保でき、玉伸びも良い。本多さんの場合、ポリポット育苗で夜冷処理をした株よりも二番果の収穫が早まり、1作の10㍎当たり収量は約1・5ト増えた。

キューブの価格はポリポットよりも高いが、本多さんは「年内出荷できるイチゴで取り戻せ、企業経営であれば省力化で人件費も削減できる」とする。

同社によると、全国では観光農園などの利用も多い。営業開発部の藤井一徳副部長は「全国のイチゴ苗約4億株の1割での普及を目指したい」と話す。

（小林千哲）